

「地域で進める『六位一体』でのがん対策」の大切さ

室蘭民報社 編集局報道部

松岡 秀宜

「『がん』は二人に一人がかかる時代」を迎え、「三人に一人が『がん』で死ぬ時代」となった。インターネットで「がん」と検索すると、治療法の解説に早期発見の重要性、患者団体の活動、そして、残された時間を有意義に過ごす大切さ…など、硬軟問わず、さまざまな情報が見つかる。

道内の「がん死亡率」は上昇の一途をたどる中、道では「北海道がん対策推進計画」で、2018年度から向こう5年間で「がん死亡率を全国の平均値まで下げる」ことを掲げている。第1期、第2期計画では未達成。それだけに、目標達成への道のりは長い。だからこそ、原点に立ち返り、立場を越えた「連携」を図っていくことも重要ではないだろうか。

室蘭では『オール室蘭』&『六位一体』の態勢で、がん対策への取り組みを進めるため、2016年2月に「室蘭がんフォーラム」が発足した（現会長は野尻秀一室蘭市医師会長）。道内自治体では初の取り組みで、「がんになって安心できるまちづくり」を目指して、一体となった活動を進めている。

2015年4月。全道の自治体では初となる「室蘭市がん対策推進条例」が施行された。総合的かつ計画的ながん対策の推進を目的に、教育、保健医療福祉、事業者、市民が一つになって、「がん教育やがん対策に取り組むこと」も明記された。

いわば、「がんの医療や対策に携わるすべての関係者が連携し、『オール室蘭』で課題解決に取り組む必要性」を記した格好だ。この趣旨に沿い、患者を中心に、医療者、政策を実行する行政、条例や予算を決める議員、患者らを支える企業・経済団体、報道機関の6者が連携する「六位一体」の考えに基づき、適切な役割分担と一体化した動きで施策を進める組織一として、「室蘭がん対策協議会（現・室蘭がんフォーラム）」が発足した。

同フォーラムでは、がんの部位別の予防法や治療法をテーマにした講演会や意見交換を主体に、これまで、計15回の会合を開催。この会合の“結果”は、報道機関が詳報し、市民らに呼び掛けたり、周知するシステムを築き上げている。

そして、発足当時は計10機関だった構成機関（団体・社など）は、現在は計13機関まで増え、「官・医・患・民（議会や企業含む）・報」が一体となった「オール室蘭」の態勢の構築&充実にもつながっている。

また、「室蘭がんフォーラム」の特長的な活動の一つが「会合後の懇親会」だ。がん教育を充実させるため、受動喫煙防止ポスターの原案は子どもたちから募集するべき—となったのは、この懇親会からだ。「ただの飲み会」ではなく、「忌憚のない意見交換ができる場」として重宝されている。

活動3年目に入った本年度は、受動喫煙防止対策を進めるための共通認識を図り、具体的な方策を考えるきっかけづくりにと、「室蘭禁煙フォーラム（仮称）」の開催も予定している。室蘭市内小中学生対象「たばこの害のないまちづくり・ポスターコンクール」も、懇親会で話題となった案で実施した。

今後も「がん」を発信する活動を続ける事で、地域の医療資源を生かしたまちづくりや検診の受診率向上など、がんに対する理解の浸透を図り、「がんと共存できる社会」の構築も進める考えだ。

一方、道外の医療機関では、このほど、コンピューター断層撮影装置（CT）での画像診断による「がんの見落とし」が明らかになった。担当医が検査画像の中で、患者の主症状に関連する部分にしか、注意を払っていなかったことが原因だ—という。

しかし、放射線診断専門医と「連携」して、よく見ていれば、もっと早い段階でがんを発見できたかもしれない。進歩した診断技術が有効に活用されない状況は、到底納得できず、極めて残念な状態だ。

医療技術の進歩に伴い、医師が扱う情報量も大幅に増えている。高度医療の現場では、専門領域の細分化も進んでいる。だからこそ、診療科を超えて情報を共有するなど、病院内といった「狭い範囲での連携」が進めば、ミスも無くなり、診療技術の向上などにもつながるのでは。対岸の火事と思わず、各医療機関が再発防止に取り組む事も重要だ。

その一方で、「がん」に関して、地域内といった「広い範囲での連携」が進めば、早期発見・早期治療の重要性もより一層PRでき、結果的には、5年・10年生存率の向上にもつながるのではなからうか。

命を預かる医師の責任、住民の健康寿命を延ばすための施策、がん患者団体の前向きな活動…など、それぞれの立場の動きを報道機関は逐一、報道する。少なくとも、室蘭（西胆振医療圏）では、そのような体制になっている。

「がん」に関する連携の強まりと深まり。「室蘭がんフォーラム」を発足から見つめてきた記者の一人として、その活動内容に確かな手応えも感じられる。

と同時に、「道内の他地域にも、室蘭の活動を参考にしてもらえれば」とも率直に思う。だからこそ、北海道医師会には、『六位一体』でがん対策に取り組む」とする考えを、全道にさらに普及させる—といった役割も期待したい。

プロフィール 1973年4月、苫小牧市生まれ。駒大苫小牧高校、駒澤大学法学部卒。96年4月、北海タイムス社入社。警察・司法担当記者として勤務。98年11月、室蘭民報社入社。本社編集局報道部記者、東部支社記者などを経て、08年4月から本社編集局報道部記者。経済担当などを経て、国や道の行政機関、医療・福祉などを担当。